

NS叢書

柏原兵三の 人と文学

しんせい会編集

三 修 社

NS叢書

柏原兵三の人と文学

しんせい会編集

三 修 社

NS叢書

柏原兵三の人と文学

1974年4月1日 第3版発行

編集 しんせい会
編集責任者 谷口 茂
松本道介

編者との
契約により
検印廃止

発行者 前田 完治
発行所 株式会社 三修社

定価950円

〒113 東京都文京区本郷2-26-11

電話 東京(813) 4031(代)

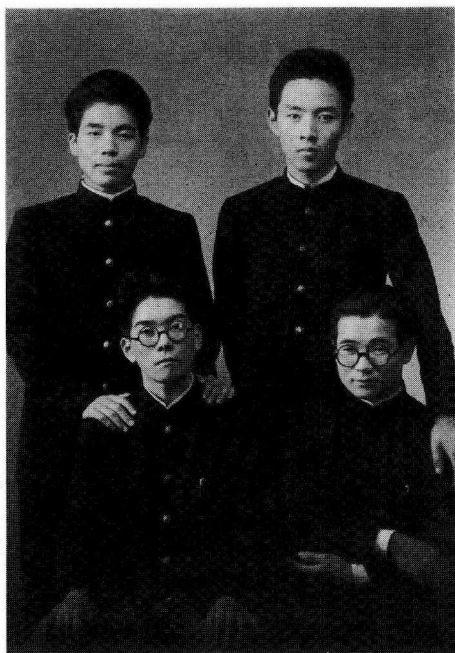
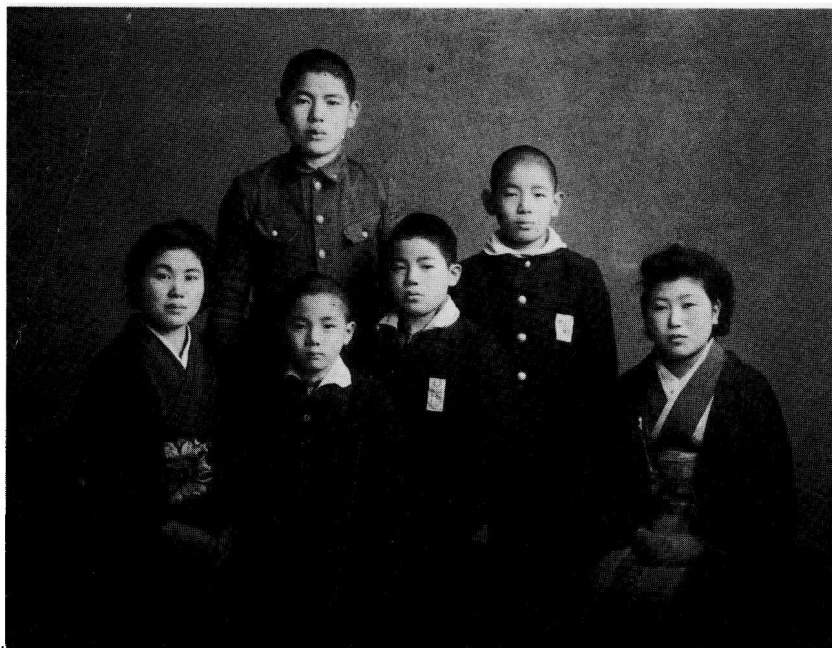
振替口座 東京 72758 番

印刷所 凸版印刷株式会社

0395-650030-2767

小学校三年生の頃

左より母（美代子）、長兄（兵一）、弟（兵四郎）、兵三、次兄（兵次）、叔母（初子）



右・日比谷高校時代 左より、上段・柏原、藤井宏昭、下段・平沼高明、矢島清光
左・運河発刊の頃—昭和31年 左より、上段・佐々木進司、奈良正博、下段・柏原、折原浩

昭和四十六年十一月

左より母（美代子）、兵三、長男（光太郎）、妻（悦子）



徳山道助の帰郷

柏原兵三

第一巻

徳山道助の故郷の家は小高い山の中腹にあつた。川沿いの村道からその家の脇の大きな櫓と白壁の土蔵が見える。櫓は二か

並んでいて、片方は少し大きかつた。土蔵はこの辺りの農家にもあまりで、別に彼の家が蓄えていることを意味しない。白壁であるのが特徴的なわけである。彼の家は山あいの険しい地を先祖代々が切り拓き殖やして行った田畑を耕し、その傍に農舎を営んで来た負い目な自作農であつた。たゞこの土蔵の白壁はこつあつたの景観に独特の風趣を添えていた。ぬきでるような白壁は、誰の目にもしみ入るやうで清深な印象を与える。彼の手

目次

柏原兵三の人と文学

第一部 柏原兵三の文学

柏原兵三の自己限定

絶対化されぬ自我

長い道の果てに

『ベルリン漂泊』について

方法としての文体——『仮りの栖』『ベルリン漂泊』について——

素朴とナルシズムと

不安の童話的イメージ

時代離れの文学

遺された想ひ

和泉 あき 11

高橋 英夫 30

入江 隆則 40

江藤 淳 48

小堀桂一郎 51

西尾 幹二 66

西尾 幹二 76

松本 道介 81

高井 有一 99

第二部 思い出の中の柏原兵三

幼年時代

おいたち

柿の木

優等生と腕白

柏原美代子 111

片桐 茂治 114

渡辺 孝雄 117

千駄ヶ谷国民学校

教師の眼から

疎開者を迎えて

『長い道』の背景

日比谷時代

弟のこと

中学のころ

弟の友だち

断片

青年文学会前後

大学時代

『ねずみ』のことなど

「運河」同人

しんせい会草創のころ

大学院時代

日比谷での思い出

西村洋一郎 119

海老沢 洸 121

土井 玲子 130

柳平 孝 132

伊東 兵次 134

藤井 宏昭 138

加藤 恭子 139

平沼 高明 144

矢島 清光 147

木下 俊夫 157

奈良 正博 159

丸山 匠 164

高辻 知義 167

吉島 茂 171

『ドイツ文学デブ優位説』

兄と私

結婚

旅の人

婚約まで

媒妁人として

就職と留学

千葉時代

ベルリンの一週間

十人前のタラチリ

ベルリンのお住まい

受賞の頃

『徳山道助の帰郷』前後

もう一つの顔

死の前後

サンフランシスコの夜

清水 豊明 173

広海 睦子 176

小堀 節 181

谷口 茂 187

登張 正實 189

重信 常喜 192

斎藤 栄治 196

田中千枝子 199

滝内美知子 212

坂本 忠雄 214

谷口 茂 221

宮下 啓三 223

芸大時代

奇遇

病氣のこと

病氣、死、そして葬儀

桜餅

出会いと別れ

柏原兵三・鎮魂

刻苦勉強の一生

最後の顔

「文芸時評」より

飲み友達

柏原兵三氏の体験

死の試練

旅立ち

別れ

出会いの頃

黒沢 茂 227

永井 清彦 231

柏原 悦子 233

西尾 幹二 245

沢木 欣一 252

山田 智彦 253

大江健三郎 257

高井 有一 260

谷口 茂 263

江藤 淳 266

加賀 乙彦 269

後藤 明生 272

宮脇 修 275

野海 青児 277

滝内 槇雄 279

細井 雄介 283

第三部 記 録

新潮新人賞選評より——中山義秀

芥川賞選評——

三島由紀夫・石川達三・大岡昇平・舟橋聖一・瀧井孝作・丹羽

文雄・石川淳・井上靖・永井龍男・中村光夫・川端康成

年譜

弔辞

福井直俊・柚木栄吉・佐々木進司・高井有一

書誌

あとがき

表紙装幀

本文カット

宮下啓三

霧生昭良

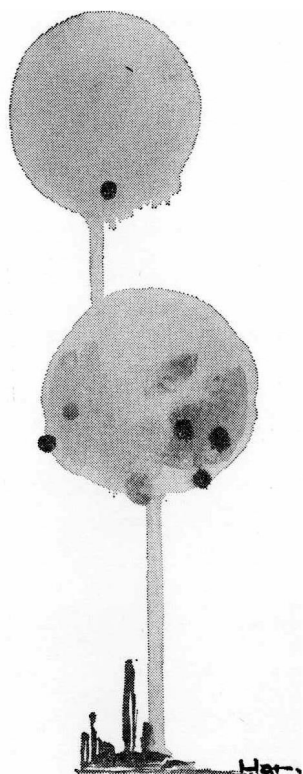
325 303

299 297

287 287

第一部

柏原兵三の文学



柏原兵三の自己限定

和泉 あき

私が文芸季刊誌「文学的立場」に「柏原兵三論」を掲載したのは、一九七二年一月刊の同誌第六号である。この号は「内向の世代」特集であった。私は、この特集に「柏原兵三論」を書いて連なることに異存はなかったが、同時に柏原氏の作品を「内向の文学」と言い切ってしまうことには、ある種の躊躇を覚えざるを得なかった。ということは、私が氏の作風を、社会性の強いいわゆるアンガージュの文学として捉えないことは勿論ながら、しかし同時に、自己をとりまく状況を故意に切断して、内面の自意識の剔抉にのみ向っていく作風とも考えていなかったということだと思ふ。私が「柏原兵三論」に、特に「自己限定」というような表題を附して貰ったのは、こうした気持ちの故であった。正直に言って、私小説に対するぬき難い偏見のある私にとって、それまでの柏原氏の作品はそれほど身近な存在ではなかった。だから私が氏の作品に接したキッカケは、私たちの雑誌の特集のためではなく、偶然、当時担当していたある書評誌の文芸時評のために、氏が「新潮」一九七一年九月号に発表された中篇小説『独身』を読んだからであった。この作品については本文でも触れているので、重複することは避けたいと思うが、一

見、健全で真摯な青春小説といってもいい『独身』のなかで、主調底音のように漂っている荒寥とした醒めた人生認識に、私は心惹かれたのである。主人公が友人に誘われて、ある温泉町で始めて女性と交渉をもつ前、秘密めかした雰囲気の中で、昔、吉原で幫間をしていた老人の演ずる影絵芝居を見る。影絵としては絶妙な演技を見せた人形が、実はむき出しのベニヤ板を貼り合せただけの繰り細工であることを知り、主人公はその実相よりも障子紙を隔ててみる仮象の世界の方が、自分には性に合っているのかもしれないと考える。私はそこに向ひ的な人生遍歴者の意欲や、挫折という名の甘美な青春体験ではなく、存在の寂莫や喪失感を感じざるを得なかった。私が氏の作品に惹かれたのは、その一点にかかっていたといつてよいかと思う。しかも、氏はそれを決して声高に叫ぼうとはしない。氏の醒めた認識は、それがドイツ人であろうと日本人であろうと、いつも自己の周辺の平凡に生きる生活者たちに限定されていた。従つて方法はいつも私小説的であつた。私は氏の作家としての今後の進み方に関心せざるを得なかったのである。

私はこのような関心のありかを最初からうまく説明することができなかったのも、前記の「柏原兵三論」の出だしのところは、大へんもつて廻つた余計なものになつてしまつた。今再録を機会に、はじめの部分を削つていさか氏の追悼の文字を連ねたいと思つたのである。あとでうかがえば、氏が不慮の死を遂げられる兆候は前からあつた由であるが、一介の読者にすぎない私は知る由もなく、まだ若い氏の今後に期待する結論になつたのは、止むを得ぬことではあるが辛い。氏は小論に早速丁寧な謝辞と、当時一冊だけ未見であつた短篇集を送つて下さつた。それが氏の最晩年に近いお手紙であらうとは、なお思ひ及ばぬことであつた。突然の訃報は、氏の作品の主調底音を今さらのように私に感じさせるとともに、因縁めいた愛情の念を抱かせることになつたのである。(二十、追記)

◇ ◇
「文学界」昭和四十六年九月号に、「現代の批評」と題する入江隆則、柄谷行人の対談が掲載されている。三島由

紀夫、高橋和巳をいずれも身体に対する精神の優位Ⅱ形式論理として批判し、ついでに戦後文学の理念を否定して、「自意識の文学なんてのは……うんざりする」（柄谷）という。物を書くということは何かをのりこえたりすることでは全然ない。入江が「文学にしても、批評にしても、観念の既成の枠がいろいろあって、人間ががんじがらめにされている……それをこわさなければいけない」というと、柄谷は訳知り顔に「こわれていますよ、すでに。……こわれた先をみとおして、ばくなんかは考えてきているわけですけども。政治と文学、組織と人間、私小説と本格小説、西洋と日本、近代と前近代、こういう枠組はとくにこわれているんですが、こわれた方がほんとうは難しいんです」と答えている。ここで言われているのは、思想や理念、政治的、社会的現実その他諸々の状況の拒否なのである。そしてさらに明らかなように、この論理は現在「内面の文学」とか「内向の世代」と言われる一群の作家たちの傾向に対するアリバイ提供なのである。そのアリバイを説明するのに、柄谷は「常民的部分」とか「常民的構造」という言葉を持ち出し、入江も全面的にそれに賛同している。柄谷によれば「柳田国男がいつている『常民』という部分はあるんじゃないでしょうか。……農耕社会としてみれば、日本だって、二千年ぐらい本質的にはほとんど変わっていない……先端の様式的な変化は一つの世界像の転換みたいなものとして生じてきたわけですが、常民的部分はあまり変わっていないんじゃないかと思うんです」ということになる。二千年といえば日本のほとんど有史以来ということになるが、その間変らない「常民的部分」とは一体何なのかなどとまともに驚いてみても始まらない。このいささかこけおどかしの言葉（断わるまでもないが、私は柳田民俗学が明らかにした民族の生活の深層部分をこけおどかしだなどというわけではない）の意味するところは、自我や自意識や観念や、その他近代社会が育くんだものろの個我的属性を取り去った状態をさすものらしい。それならばなおさら分らないという当然の疑問が出てくるところだが、ひとまず彼らのいう「常民的構造」の実際の適用の例を見てみよう。「自意識の文学」に対して「古井さんというのは、個体が外に解けてゆくか、内に溶けてゆくか、いずれにしても、非常に不安定なものである」という認識がある……古井さんのうまいのは、人間をそういう磁場みたいなところでとらえる点ですね。独立した

自我とか、人格というものがないんですよ。そういう関係性においては。……常民的世界の構造でもあると思いますね。古井さんの例の小説「文芸」の連作五部作——引用者——は、そういう民俗学的色彩があるんじゃないですか」ということになる。柄谷をうけて入江は「古井さんにしたって、阿部昭さんにしたって、後藤明生さんにしても、新しいものを搜そうと思ったら大間違いで、まさに常民のものなんですね。もし新しさがあるとすれば、いままで見えなかったものが多少見えるようになったという新しさですね。それがわからなかったというのが、もしかすると戦後批評の弱点だったのかもしれない」といつている。古井や阿部や後藤の作品が新しいか、新しくないか即断しようとは思わないし、またそれは文学の本質にとつてどうでもよいことだが、彼らの文学が人間との関係において確固とした自己をもち得ず、したがって帰属すべき関係性への信頼を喪失していることはたしかであろう。関係性への信頼において、個が強固に集団に包摂され、その結果として集団の日常性が個の生活に対しても強い倫理的規範力をもち得ていた時代、つまり個の未発の状態における日常性と、近代的自我が分裂し、個が帰属すべき場を喪失してその内面に漂流している文学が招来する、日常性やモラリズム回復への固執を、「常民的構造」として括るのだとすれば、後者を前者へつなぐキイワードは「歴史の捨象」であろう。柳田が、日本的近代への反措定として提出した「常民的構造」などと、それが最も遠いところにあるのはいうまでもあるまいと思われるのだが。

一般に、六〇年安保闘争以後の思想状況にあつては、土着や伝統をもち出すこと自体ひとつの流行現象であつた。その結果、柳田民俗学や折口信夫の古代研究は、きわめて高い評価をうけるようになった。それは戦後革新政党および進歩的知識人が体制内野党化して喪失した変革の契機を、民族の土着のエネルギーに求めるといふ問題意識に支えられている限り、単なる流行現象に止まらず意味をもち得る。一般に主体的な思想的営為をなすものにとつて、国の伝統や土着が重視されなければならないのは当然のことである。また日本近代が、体制側も反体制側も、あるいは故意に圧殺し、あるいは近代化西欧化の視点から取り残してきた土着のエネルギーを掘り起して、変革の契機とすることは、口でいう程簡単ではないが重要に違いない。しかし、元来六〇年安保以後、土着や伝統を論じた者